

日英同盟締結交渉の再検討

中村 日向子

はじめに

本稿の目的は、日英同盟交渉と併行して進められた伊藤博文による対露交渉のプロセスを再検証し、この二つの交渉がどのように連携しながら進められたのか、を伊藤を中心に解明することである。

日英同盟交渉の研究のうち、伊藤博文の洋行にふれた研究は、概ねその洋行の目的を日露協商交渉とし、「伊藤博文の露都訪問が、むしろ英国政府を促し」た⁽¹⁾とするものの、伊藤は日英同盟交渉中、政府の意向を酌まずに対露交渉を進めようとしていたとされてきた。⁽²⁾これらの多くは、伊藤が対露交渉を進めようとしたのはなぜか、ということに焦点を当てている。

柴崎力栄氏は、伊藤と井上馨との間で交わされた電報をもとに、伊藤が洋行の中で対露交渉を独断ですすめようとしたのは情報不足によるものであるとした。⁽³⁾藤井信行氏も、伊藤が情報不足により日本にいる元老の意向を酌めなかったため

に對露交渉を桂に勧めたのであるとしている。⁽⁴⁾

しかし、伊藤が情報不足であったかどうかについては、日英同盟交渉が本格的に始まる一〇月七日以降の、伊藤の日英同盟交渉についての情報の把握の程度や、伊藤と桂の間に交わされた内容を検討する必要があると思われる。結論から言えば、伊藤は日英同盟交渉に関する情報を十分に共有し意見も述べながら、日露交渉に臨んでいたのである。

これに対して、千葉功氏は、柴崎力栄氏や藤井信行氏と同様、「伊藤と桂の対立は原則論によるものではなく、意思疎通の不充分によるものであった」とするものの、日英同盟交渉の急速に進展し始める一月から伊藤が日英同盟交渉に関与していたことを示している。また、伊藤がロシアでの交渉を終えたあとの桂とのやりとりを取り上げており、満韓交換論において対立がないことを桂が伊藤への誤解をといて行く過程を追い、伊藤が手紙によって行っていたラムズドルフ外相との對露交渉を中止する段階においては、桂と伊藤の間で同意があったことを示している。

本論文では、この千葉功氏によって示される交渉の内容に対して、伊藤が安定した情報基盤を持っていたことを示すことで、特に一一月以降、伊藤が日英同盟交渉について誤解によって行動したことはなく、日本政府と伊藤は連携が十分とれていたのではないか、ということ明らかにしたい。

1 伊藤博文の洋行の決定

伊藤は、一九〇一年五月に第四次伊藤内閣が予算問題をめぐる閣内の対立によって首相を辞職し、その後は、立憲政友会の中で起こっている政治的対立について、総裁として取り組む立場にあった。⁽⁵⁾

九月一日、桂太郎・山県有朋・井上馨・伊藤博文の四名で、桂太郎私邸において日露交渉に関する会談が行われた。桂太郎はこの会談の中で「伊藤侯カ責任ノ地ニアラサルヲ利用シテ個人ノ資格ヲ以テ露国ノ当事者ト思イ切テ諮論ヲ試ミラレ若シ現行ノ日露協商ニ優レル取極メノ基礎ヲ発見セラルルニ於テハ不同意ノアルヘキ筈」なしとしたとしている。⁷伊藤が個人の資格でもってロシアと現行の協商よりも優れた取り決めの基礎が見つけられればそれに不同意であることはな⁸いとしたのである。翌一二日に井上馨から桂太郎に宛てられた電報で、「昨夜異口同音之良結果に至り、実に万幸と奉存候。」という記述があるので、全会一致で伊藤博文の洋行が決まったことが推測される。⁹

会談が行われた九月一日には、日英同盟交渉は、駐英公使林董が当時臨時外務大臣であった曾禰荒助に対して、林董自身にイギリス政府と日英同盟交渉に関して意見交換する権限を与えるよう求めている段階であった。¹⁰具体的な草案は両国から未だ出されておらず、本格的な交渉に入る前段階であったといえる。対露交渉についても、「現行ノ日露協商ニ優レル取極メノ基礎」を求めるのみであり、未だ具体的な構想はない。対英交渉や対露交渉における明白な方針がないまま、伊藤の洋行は決定した。¹¹

伊藤は、九月一八日に横浜を出発し、まずはアメリカに向かった。一〇月二〇日にルーズベルト大統領と会見したのち、二三日にはエール大学の名誉博士号を授与されるべくその記念式典に参加した。数日の滞在ののち、伊藤はフランスに向かった。¹²

2 伊藤博文の日英同盟交渉の進捗の把握

一月一日、外務大臣小村寿太郎が駐英公使林董に対して、電報で伊藤に日英同盟の進捗を伝えるよう命じた。⁽¹³⁾

貴電第一八〇号ニ関シ帝国政府ノ確定決議ハ追テ貴官ニ電報スヘシ、其間ニ貴官ハ伊藤侯ヲ其在所巴里又ハ其他ノ所ニ往訪シテ本件（日英同盟：筆者注）ニ関スル近頃ノ電信ヲ総テ同侯ニ示サルヘシ、貴官ハ又英国案ノ大体ノ主義ニ付同侯ノ賛翼ヲ獲ルニ努メラルヘシ

（読点は筆者、以下同じ）

史料中の第一八〇号の電報の内容は、一月七日のイギリス政府による日英同盟草案の報告である。⁽¹⁴⁾ その内容について日本政府内で検討している間に、林董は伊藤と面会してこれまでの日英同盟交渉について示した上で、イギリス政府の日英同盟草案に賛同を得るよう命じられたのであった。

林董は、この小村の命を受けてパリに向かい、一四日に伊藤と直接面会した。伊藤はそこで日英同盟の進捗を知る。日英同盟交渉は、一月一日にイギリスで林董とランズダウン外相との間で第一回公式会談が開かれたのち、⁽¹⁵⁾ イギリス政府の閣議を経て、一月七日に林董が草案の手交を受けるところまで進んでいた。⁽¹⁶⁾

第一回公式会談は、林董の発言は事後的に承認を受けるものであるとした上で、ランズダウンに日本政府の希望を問われて林董が答える形で進行した。この会談での林董の発言は、一月一九日に小村によって承認を受けた。⁽¹⁷⁾ 林董は、韓国における日本の利益を維持し、他国にその利益を妨害されないことを求め、清国に関しては領土保全・門戸開放を求め

た。対してランズダウンは、イギリス政府の希望として東アジアでの問題に関し締盟国が連携することを求めた。

一月七日のイギリス側草案の前文では、「韓国カ如何ナル外国ニモ併吞セラレサルコト及ヒ清国ノ独立ト領土保全ヲ維持シ同国ニ於ケル商業及ヒ工業ニ付キ各国均等ノ企業権ヲ享有スルコトニ関シ特別ナル利害関係ヲ有スルヲ以テ」⁽¹⁸⁾締盟国は約定するとあり、清国に関する領土保全・門戸開放を同盟の核としている。韓国問題については韓国が併吞されないことを示すのみであり、韓国における日本政府の利益を十分に保障するものではなかった。

一五日、伊藤は桂に対して自身の見解を送っている。その電報では、清国の範囲の定義が不明であることなどとともに、別款について東洋にイギリスと日本の軍事力が増大すると他国がそれを警戒し軍備を増強する可能性について考慮しなければならぬこと、ロシアと協調するのは不可能ではないこと、そしてドイツの態度とを考慮すべきであることを述べている。⁽¹⁹⁾

この意見から、伊藤は日英同盟を締結することで惹き起こされかねない国際関係上の問題について危惧しており、その問題について検討する必要があると考えていたことが分かる。しかし、それに対する桂の返信は伊藤の疑問を解消するものではなかった。二〇日に桂は「甚々重大ナル理由ナクシテハ此上我回答ノ延引ヲ許サ、ル事トナレリ」とし、「閣下ニ於テ同盟問題ハ既ニ我方ニ於テ甚シク国信ヲ毀損セスシテハ最早本件ヨリ退脱スル事克ハサルノ域ニ進ミタルモノナル事ヲ念慮ニ留メラレン事本大臣ノ希望スル所ナリ」と、日英同盟交渉自体を中断することは不可能であると告げ、⁽²⁰⁾二七日にも日英同盟交渉を中断できない旨を繰り返し「露京ニ於ケル閣下ノ行動ハ林男爵ノ望マレタル如ク談話上ノ意見ノ交換ニ止メ」るように伊藤に告げた。⁽²¹⁾

桂が言うように、林董が伊藤のロシアでの行動の内容によつては日英同盟交渉に支障が出ると述べたのは、伊藤のロシア行きに対してランズダウンと外務次官補バーチーが猜疑の念を抱いていることを林董に漏らしたためである。その様子について林董は「露国ト何等別約ヲ為スコトモアラハ彼等定メテ非常ニ忿怒スヘキノ意ヲ言外ニ漏シタリ」と小村に報じ

ていた。しかも対談で林董が「伊藤侯ノ此行ハ単ニ偶然ノ思付ニ出テタルモノナルコトニ説述シ」たけれども、ランズダウンとバーチーの両者は満足しなかったとしている。この林の電報の写しは、伊藤にも送られた。⁽²²⁾

十一月二八日、伊藤は井上馨より電報を受け取った。⁽²³⁾

林公使ヲ經テ同盟懸案ニ付出来得ル丈速カニ此上ノ交渉ニ踏ミ入ルコトヲ得策ト考ヘラル、トノ電報ヲ一見セリ、然ルニ第一、英国ノ慣習ニアラサル攻守同盟ヲ急速ニ断行セントスル真意解シガタシ、我ヲ利用シテ英国ノ難ヲ避ケントスル策ニアラサル歟第二、独逸国ハ此同盟ニ加入セサルナラム、第三、若シ日英同盟成立セハ露独仏対清攻守同盟ヲ決行スル必然ナラム、其結果我国ノ利害ヲ深ク講究セサルヘカラス：

井上馨は林董からの電報を見て、「栄光ある孤立」といわれる政策を採ってきたイギリスが同盟を締結しようというのは理解しがたく、日本政府を利用しようとするものではないかと疑っている。また、ドイツがこの同盟に加入しないで日英同盟が成立すれば、ロシア・ドイツ・フランスが清に関する同盟を必ず結ぶであろうとし、その可能性も視野に入れて利害を考えるべきだとしている。

この十一月二八日付電報について、柴崎力栄氏は「井上発電報を受け取った前後で、伊藤の態度に明確な変化が生じている」⁽²⁴⁾と指摘する。⁽²⁵⁾電報中の「其結果我国ノ利害ヲ深ク講究セサルヘカラス」という箇所によって、伊藤は井上馨だけでなく日本政府が日英同盟交渉に慎重であると誤解したとし、⁽²⁷⁾そのことによって対露交渉に積極的な動きを見せるようになるとした。この文言が実際に伊藤によって正しく読み取られていたかは不明であるが、それに対する伊藤の返信を読むと、伊藤が日本政府の日英同盟交渉への姿勢が消極的であったと誤解したとは言いがたい。

伊藤が井上に返した電報では、伊藤は井上馨の意見について「大体ノ主意ニ付キ拙者ハ全然同意ナリ」とし、特にドイ

ツが同盟に参加しないことについては同意見であるとした。⁽²⁸⁾確かに井上馨の挙げた問題点は一月一日に伊藤が桂に宛てた日英同盟の意見の内容と似ているといえる。それらの問題があるとした上で、伊藤は日本政府の日英同盟交渉の動きについて以下のように意見を述べた。

拙者ハ再度内閣総理大臣ノ注意ヲ惹キタルモ回答ニ接セス、而シテ一面ニ於テハ（中略）日本政府ハ英国トノ同盟ニ決シ居ルコトヲ告ケ、又一方ニ於テハ林男爵モ亦伯林宛テ拙者ニ送リタル書面ヲ以テ露国ト一ノ協調ヲ為スノ企ヲ思ヒ止ランコトヲ拙者ニ向テ最モ熱心ニ頼ミ来リテ曰ク、単ニ之ヲ企ツルコトスラ同男ノ懸案交渉ヲ危殆ニ陥ラシムヘシト、（中略）

情勢此ノ如クナルヲ以テ拙者ハ拙者カ当地ヘ來ルノ当初ノ目的ニハ全ク反対ナルヲ知りナカラモ政府ノ希望ニ適從スルノ外ナシ

拙者ノ信スル所ニ拠レハ当地ノ意向ハ日本ト一ノ協調ヲ遂クルニ在リ、本日謁見ノ際皇帝ハ拙者ニ語ルニ、右協調ハ両国相互ノ利益ノ為メ將タ東洋ノ平和ノタメ願ハシキ旨ヲ以テセラレタリ、拙者ハ日本政府ニ於テ懸案交渉ニ関シ確定ノ決議ヲ為ス前ニ先ツ以テ露国力如何ナル程度マテ讓歩スルニ意アルヤヲ測量スルノ慎重用心ヲ可トスルニ於テ閣下ト同意ナリ

柴崎力榮氏は、この電報における後半部に注目して、「『雑談的意見交換』の範囲を超えて（日露）協商について意見を交換する許可を求め」⁽³⁰⁾ているとする。しかし、この電報の傍線部に注目すると、伊藤は、この電報を送る以前の桂太郎や林董とのやりとりによって日英同盟を優先させる日本政府の動きを察知しており、洋行に出發する前の九月一二日の会談の中で伊藤の対露交渉にめざされた、「現行ノ日露協商ニ優レル取極メノ基礎ヲ發見」するという目的とは異なるもの

の、情勢に鑑みると現在の方針に従う他ないとしていることがわかる。⁽³¹⁾ このことから、十一月一四日の林董からの日英同盟交渉に関する情報の提供や、桂太郎との連絡を通じて、伊藤がその進捗を知ったことで、洋行出発前と状況が変わっていることを理解していると考えの方が自然である。伊藤は、この時点ですでに、否定的な目線を注いでいたとはいえ、日本政府が日英同盟交渉を進める方針に決定していることを理解していたのである。⁽³²⁾

一月二八日、イギリスの草案に対する日本側修正案が閣議決定された。⁽³³⁾ 修正案では、前文において締盟国以外の国が韓国を併呑することや韓国の領土を一部占領することを防ぐとし、韓国に関する規定を追加した。また第三条において両国が日英同盟以外の同盟を結ぶ余地を加え、第五条で同盟の効力の期限を設けた。別款第三款では、日本が韓国における利益を増進するための方策をとることをイギリスが承認する規定を設けた。修正案で日本政府は、イギリスの出した草案に対して、韓国における日本の利益を保障する内容の文を追加したのである。

二九日、小村寿太郎は林董に対し、この日本政府の日英同盟の修正案を伊藤に知らせる方法について電報を送った。⁽³⁴⁾

同伴（日英同盟修正案：筆者注）ニ付キ伊藤侯ノ意見ヲ確ムヘキ旨均シク御沙汰アリタリ、然ルニ修正案ノ条文ヲ露京伊藤侯ニ打電スレハ漏洩ノ危険アリ、因テ貴官ハ至急貴官ノ一員ヲ露京ニ派シ之ニ修正案ノ条文（但シ暗号マ、）ト併セテ桂首相ヨリ伊藤侯宛ノ左ノ音信ヲ携帯セシムヘシ

内閣ハ英国政府トノ懸案交渉ヲ進ムルコトニ決議シ、英国ノ協約案ニ対スル修正案ヲ天皇陛下ニ上奏シタリ、陛下ハ目下修正案ニ関シテ諸元老ニ御諮詢中ナリ、閣下ヘハ本大臣ヨリ右ノ趣ヲ以テ閣下ノ意見ヲ問合スヘキ旨御沙汰アリタリ、在英公使ハ漏洩ノ危険ヲ避クルカ為メ其館々員ノ一人ヲシテ修正案ヲ携ヘテ在露京閣下ノ許ニ至ラシムヘキ旨訓令セラレタリ（暗号ヲ解読スルコトハ在露公使館ニ託スルモ可ナリ）、就テハ本問題ニ対スル閣下ノ意見ハ至急電報ヲ請フ

小村は、天皇が桂に対して伊藤の意見を求めたことにより、日英同盟の修正案が漏洩しないように、イギリス公使館から館員一名をロシアに派遣し、伊藤に桂からのその状況を知らせる電報と修正案を渡すように命じたのである。

この電報から、ロシア滞在中の伊藤に対して日英同盟草案を送るにあたって、ロシア政府に日英同盟草案が漏れることを警戒して慎重に行動していることがわかる。これは、日本政府が日英同盟締結に注力し、伊藤との連携のもと、確実にその交渉を進めようとする姿勢の表れであるといえよう。

その時期の伊藤は、一月二六日から二月四日までロシアのペテルスベルクに滞在し、二月二日にはロシア外務大臣ラムズドルフと会見し、二月三日にはロシア大蔵大臣ウィッテと会見していた。

ロシアでの伊藤の会見は、双方の日露協定の意志を確認するものにとどまった。ラムズドルフとの会見では、伊藤が韓国について助言と援助を日本に一任してほしいと言ったのに対し、ラムズドルフは日露が共同で韓国に対し助言を行うべきであるとした。⁽³⁵⁾ ウィッテとの会見では、ウィッテは日露両国が韓国を占領しないことを協定として結ぶべきであるとした。⁽³⁶⁾ 両者とも、日露が協調することについては賛成したが、韓国問題への日本の優位を求める伊藤の要求には反対した。これらの会見では、ロシアによる日本政府への要求については言及がなされず、一方的に日本政府の要求が提示されたにすぎなかったのである。

さて、小村の命により、伊藤のもとに日本政府側の修正案が伝わったのは、会見の後の二月三日の晩であったと推測される。⁽³⁷⁾ 伊藤も、この修正案を受け取るにあたって、小村が日英同盟交渉に関してロシアへ情報が漏れることを警戒しているのを感じ取ったに違いない。伊藤は、修正案について二月六日に桂に電報で意見を送っている。その電報において伊藤は、修正案中の「現状」や「他国」の定義が不明瞭であることや日英両海軍の連帯による日本の不利益について注意を喚起した。⁽³⁸⁾

ちなみにその後、二月七日の元老会議の決定につき、同日に井上馨から伊藤に対し「林公使江宛タル電信書類等綿密

ニ取調タリ、多少吾ヨリ英政府ニ促シタル経歴アリ。因テ予ハ予ノ説ハ諸員ニ曲從スルノ外ナシト明言シタリ、就テハ該同盟ヲ速ニ結了スル事ニ決定シタリ⁽³⁹⁾との通知があつた。井上馨が日英同盟交渉を進めるべきだという桂や小村の意見に賛成したという通知である。しかし、この通知によつて、伊藤が日英同盟交渉について新たな情報を得たとは言えないであろう。伊藤は、四日には日本政府の日英同盟修正案を入手しており、六日の時点で桂に対して日英同盟草案について意見を送つていたからである。

伊藤はロシアを出発する直前の一二月四日に、ラムズドルフに日露協商の草案を手交した⁽⁴⁰⁾。これは、先述の桂による「露京ニ於ケル閣下ノ行動ハ（中略）談話上ノ意見ノ交換ニ止メ⁽⁴¹⁾」るようにといい文言を、ロシア滞在中に交渉するのは控えるべきというように解釈したためであると推測される。具体的な草案が出されてその検討が始められたのは、会見を終えロシアを發つてドイツに到着した後である。一三日にはラムズドルフから日露協商草案が伊藤のもとに届き、それ以降一二月三〇日まで、桂との電報のやりとりの中でその検討が行われることになつたのである。（註…後述するように、一三日にはラムズドルフから日露協商草案が伊藤のもとに届き、それ以降一二月三〇日まで、桂との電報のやりとりの中でその検討が行われることになつたのである。）

以上、これまで見てきたように、伊藤は、具体的な日英同盟草案が出されることに、その内容について連絡を受けており、伊藤の意見が桂や林董を通して日本政府にも伝えられていた。そのため、伊藤が日英同盟交渉の進捗について、井上馨の電報によつて伊藤に新たな情報が加えられたとはいえないため、その電報によつて伊藤の中で「誤解」が起つたとは考えにくい。

伊藤は、日英同盟交渉の進捗を把握し、その内容に疑問を抱きながらも、桂や林董によつて示された対露交渉をめぐる情勢の変化に対応したのである。

3 伊藤博文と桂太郎の電報での議論

一二月三日にウィットとの会談を終えたのち、伊藤はベルリンに滞在した。一二月六日、伊藤は桂に対して電報を送っている。「若シ帝國政府ニ於テ露国ト一ノ協調ヲ試ミントノ政策ヲ取ルニ決セラルレハ、予ハ外相ラムズドルフ伯及ヒ蔵相ウイツ氏ト個人的往復ヲ為シ居ルカ故ニ、先方カ要求スル所ノ対讓ナルモノハ正シク如何ナルモノナルカヲ確知シ得ヘキ望ヲ有ス」とし、会談で得られなかったロシア側の要求を知ることができると述べたうえで、「予ハ日英同盟ノ締結ヲハ露国ト一ノ協調出来ヘキヤ否ヤヲ確ムル迄又閣下ニ於テ独逸国ノ感情ヲ害セサルヘキコトノ疑ナキニ至ルマテ遷延セラル、ヲ得策ト考フルナリ。」と主張した。⁽⁴²⁾

この内容は、イギリス側日英同盟草案に対して一月一日に伊藤が桂に述べた意見と同様に、ドイツが日英同盟に締盟国として参加しないことへの不安を示している。そもそもこの段階で日本政府とイギリス政府が日英同盟を締結する期日が確定していたわけではない。そのため、伊藤は、日英同盟締結を延期することを求めているのではなく、日英同盟を締結するまでに考えるべき問題として、ロシア政府と協調する可能性を検討すること、日英同盟がドイツを刺激しないかどうかを考えることを挙げていることのほうがこの電報の主旨であると考えるべきであろう。

それに対し、一二月一日、桂から伊藤に対して返信がなされた。「遂ニ日露ノ協商モ満足ニ成立スヘキヤ否ヤヲ確認ナシ難シ、徒ニ遲疑シテ時日ヲ送ルトキハ英国ヲシテ其提案ヲ撤回スルノ決心ヲ起サシメサルニモ限ラサルヘク、随テ我ハ英露両国共ニ意ヲ害シ一モ得ル処ナク孤立ノ結果ヲ来スモ難斗（ママ）、寧ロ此際ニ於テ断然英ニ結フノ得策タルヲ確信シテ決議ニ到レル次第ナリ」として、ロシアでの会談前同様、今日英同盟の交渉を遅らせるのは日英同盟締結そのものが

反故になる可能性もあるとし、日英同盟の選択のほうが望ましいと決議されたことを伊藤に告げた。⁽⁴⁴⁾ これは、桂が伊藤は日英同盟締結そのものに対して否定的であると捉えたために、それを否定する必要があると感じたためだと推測される。

また、伊藤が不安であるとするドイツについては、桂は「独逸ニ交渉ヲ申込マサルハ議熟セサルニ独逸ニ謀ル時ハ之ヲ他ニ向テ利用スルノ機会ヲ彼ニ与フルト英政府ノ虞アリ、又独逸今日ノ境遇ニ鑑ムレハ、今回ノ同盟ニ加入スルノ見込更ニ無シト信スル内情モ粗察知セリ、勿論日英同盟ノ成立スルニ於テハ或ハ独逸ハ露仏ニ加担スル虞アルモ、其辺ハ帝国政府ニ於テハ覚悟ヲ決心ノ外ナシ」と、日英同盟を締結することで起こる問題については覚悟を決めたとした。桂は、伊藤が挙げた二つの問題のうち、日英同盟の締結がドイツを刺激しないかどうかという質問については回答した。ドイツがロシアとフランスに協調し日本に敵対する恐れがあることを踏まえて、日本政府はどのように決議したのだとする。

これに対し、一二月一四日、伊藤は桂に次のように返信した。⁽⁴⁵⁾

第一、貴我ノ間ニ重大ナル誤解アリ、拙者ハ決シテ日露同盟ヲ慫慂スルノ意思ヲ有セサリシナリ、協調ヨリ同盟迄ニハ猶一大行歩ノ為スヘキモノアツテ存ス、而シテ拙者ハ考フルニ、英国ト結局防衛的性質ノ同盟ヲ交渉スル間ト雖モ尚ホ韓国に關シ露国ト一ノ協調ヲ有スルコト出来ヘキコトナルヘシ、(中略)

第二、英国トノ同盟ノ訂結ハ大陸諸政府ノ感情ヲ害スルコトモアルベク、而シテ自然露国トノ協調ヲ甚タ困難ナラシムヘシ、故ニ予ハ若シ出来得ヘクンバ緩漫手段ヲ用ヒテ其訂結ヲ遷延セラレンコトヲ閣下ニ請フ、然レトモ若シ此事最早行ハルヘカラズトセバ、拙者ハ該盟約ヲ秘密ノモノトサレン事ヲ閣下ニ請求ス、但シ今日已ニ英国諸新聞就中「タイムス」カ日英間ニ一層ノ親近ヲ諷示シツ、アルヲ見ルハ拙者ノ遺憾トスル所ナリ

伊藤は、自分が日露「協商」より良好の度合いの高い日露「同盟」にこだわっているのではなく、⁽⁴⁶⁾ 日英同盟を結ぶにし

ても、ロシアと韓国問題に関して協調できるかどうか探るべきであると述べ、その協調を探るために日英同盟締結を秘密にすることを求めた。さらに、イギリスの新聞紙「タイムズ」が日英間の友好関係について報じている様子を遺憾であるとし、日本はイギリス以外との関係も考慮していくべきだとした。これは、イギリスとの交渉を続けるにあたって他国にその情報が漏れないようにすべきであるという指摘するものであり、特に伊藤はこれからロシアのラムズドルフと電報を交わす予定であったので、イギリスとの交渉の存在がロシアに漏れることを警戒したのであろう。

一七日、伊藤はラムズドルフから草案を受け取り、その内容について桂に報告した。⁽⁴⁷⁾

「ラムズドルフ」伯ハ余ノ意見次第ニテ該草案ヲ基礎トシテ東京ニ於テ両政府間ノ正式協議ヲ開クベキコトヲ申込タリ、彼ハ又該案ハ皇帝ノ裁可ト内閣ノ同意ヲ經タリト云ヘリ。右ニ對シ余ハ第四條ノ修正第六條ノ文意其他細目ニ關シ、多少ノ時日ヲ費シテ熟慮スルニアラザレバ余ノ私見ヲ明カニ表白スルコト能ハザル旨返信セントス、其ノ間ニ貴下ノ熟慮ヲ切望スルモノアリ、即チ今回ノ機會ヲ逸シ余ノ今日マデ往復シタル音信ヲ遮斷セバ或ハ恐ル好機ノ再來近キニアラザルベキコト之ナリ、若シ之ニ反シ余ニ右音信ヲ繼續スルコトヲ以テスルトナラバ、貴下ハ他ノ方面ニ於テ之カ為メニ必要ナル保留ヲ為サル可カラズ、余ハ貴下ノ返電ヲ待望ス

（傍線部筆者）

伊藤はこの電報で、ラムズドルフが提出した草案を受け取った翌日の段階で、その草案を検討するかどうか、つまり日露協商草案を進展させるかどうかについて桂に問うているのである。

これまで、伊藤は実際のな協商を結ぶのでなくとも、韓国問題についてロシアと協調するための道を探ることが必要であると桂に主張しつづけていた。しかし、この電報ではラムズドルフ草案を受け取ったことでその対処をいかにすべきか

問う必要が生じたため、桂に判断を求めた。つまりここでは、伊藤は対露交渉の中で生じた進展につき、桂に判断を委ねているといえよう。

これに対し、一二月二一日、桂は「満州ニ於ケル露西亜ノ位置ハ朝鮮ニ於ケル日本ノ位地ト同等ナルコトヲ要求セリ、然ルニ今回ノ草案ハ全然右基礎ヲ無視セリ、右等觀察点ニ関シテハ「ラムズドルフ」伯ニ於テハ毫モ誤解シ居ルベキノ筈ナシ、本官ハ本問題ノ前陳ノ状態ニ関シ成ルベク速ニ且詳細ニ閣下ノ意見ヲ本官ニ通報セラレンコトヲ望ム」とし、ラムズドルフ草案に日本が最重要とする韓国における利益への配慮がないことについて伊藤の意見を求めている。その上で「本官ハ露西亜ト協和スルコトニ反対スル者ニアラザルコトハ、貴下モ亦了知セラル、ナラン、本官ハ却テ如斯基協和ノ成立ヲ真実ニ賛成ス、然レドモ本官ノ考フル所ニ依レバ、該協和ハ帝国ノ他国ニ対シテ負フ所ノモノト調和セザルヘカラズ」とし、伊藤が主張しているロシアと協調をめざすことの必要性への理解を示した上で、日本政府の国際関係上の位置と調和しないとした。⁽⁴⁹⁾

一二月二二日、伊藤は桂に次のように返信している。

余ノ目的ハ、交互的基礎ノ協商ニ比シテ一層日本ノ為メ利益トナルベキ状態ヲ作成セントスルニアリテ、万止ムヲ得ザル場合ニ至テ即チ最下策トシテ交互的基礎マデ讓歩スルノ覚悟ナリキ、貴下或ハ今回露西亜提出ノ草案ヲ見テ前陳余ノ目的トスル所ト大差アルガ如ク感ゼラレタルナキヲ保セザレドモ、欧州ニ於ケル露西亜政治上ノ必要其ノ財政ノ情況其他種々ノ事情ニ依リテ、余ハ露西亜政府ヲシテ愚見ノ如ク讓歩セシムルコトヲ得ベシト信ズルニ至レリ、然リ而シテ將來此ノ目的ヲ遂行スルコトニ就テハ、余ノ大ニ重ヲ置ク所ナリトス、如何トナレバ、假リニ一方ニ於テ朝鮮ノ現状ヲ變更シ又ハ之ヲ維持スルコトニ関シ英国ト協和ヲ締結スルモ、他ノ一方ニ於テ同一問題ニ関スル日露協商ノ里程標ヲ進ムルニアラザレバ、毫モ帝国ニ益スル所ナカルベケレバナリ⁽⁵⁰⁾

伊藤は、現行の協商よりも日本の利益を生む情勢をつくる必要があるとし、そのためには協商でなくとも「互互的基礎」が必要であるとした。伊藤はヨーロッパにおけるロシア政府の情況に鑑みて、ロシアが譲歩する可能性はあると考えている。

これに対して、一二月二九日、桂は伊藤にラムズドルフ草案に対して意見した。

第一条ヲ以テ朝鮮独立ノ相互承認ニ止ムルコトヲナシ得ベカリシナラバ、本官ハ満足シタルナラン、独立ノ相互保証ハ啻ニ連帶責任ヲ喚起スルノミナラズ、併セテ保証国ガ被保証国ノ國務ニ干渉スルノ特權ヲ含蓄スルモノナリ、然ルニ帝國ノ政策ハ就中軍略上政治上ノ事項ニ関シテ露西亞ヲ朝鮮ヨリ確然ト排除セントスルニアリ、(中略) 最後ニ望ミ、本官ノ所見ニ依レバ商議ヲ開始スルニ先チ露西亞ヲシテ其ノ大体ニ於テ我所見ニ同意セシメザルベカラズ、兎ニ角本官ハ露西亞ト商議ヲ開クニ先チ現ニ進行中ノ大不列顛國トノ商議ヲ成ルベク速ニ結了センコトヲ欲ス⁽³⁾

桂は、第一条の「朝鮮独立の相互承認」の箇所が日本政府の求めるロシアの韓国からの完全排除の方針にそぐわないとし、ラムズドルフ草案を却下した。そして、ロシアと交渉する前に日英同盟を締結させたいと締めくくった。

桂は、伊藤の日露協商交渉を進めるかどうかの問いに対して、日英同盟交渉を優先すると回答した。ここで日露協商交渉をすすめないという選択をしたのであった。

一二月三〇日、伊藤は桂に返信し、ラムズドルフに対し「将来更ラニ音信ヲ継続スルモ或ハ又之ヲ断絶スルモ我ガ意ノ如ク為シ得ル様処置」したとし、伊藤は日露協商交渉を再開する可能性も考慮しつつ、伊藤は桂の判断に従ってラムズドルフとの手紙でのやりとりを中断した。

この手紙でのやりとりの結果、日露協商を締結しなくとも国際関係上韓国問題についてロシアとの協調をはかるべきで

あるという伊藤の意見は桂に受け入れられ、また、桂が諸々の問題点を踏まえた上で日露協商を進展させるよりもまず日英同盟を締結させるのを決定したことも伊藤に理解されている。つまり、桂にとっても伊藤にとっても、本人が重要であると主張していることが吞まれており、意思疎通は十分に達成しているといえよう。その上で、日露協商交渉は中止されたのである。

4 イギリスにおける伊藤博文の交渉

桂とのやりとりののち、伊藤はイギリスに向かい、ランズダウンと二度会見を行った。日英同盟締結の最終段階において、伊藤—ランズダウン会談が重要な役割を持ったこと、はイギリス史側の研究で指摘されているが、ここでは、伊藤が会見で何を述べ、その後、日本の要求がどのように実現できたのか追うことで、伊藤とランズダウンとの会見の内容を強く反映していることを示したい。

一月二日の第一回会見において、ランズダウンが「日英協商ト共二日露協商ヲ設ケラル、ノ意ナルヤ」と伊藤に問うたのに対し、伊藤は「誤解ノ無カランコトヲ希望ス、自分ハ決シテ英露兩國ニ対シテ同時ニ権謀策（Double jeu）ヲ講ゼントスルノ意ニモアラズ、又日露同盟ヲ主張スル次第二モアラズ、唯タ朝鮮ニ関シテ我カ利益ヲ拡張センガ為メニ日露協商ノ里程標ヲ更ニ一歩進ムルノ協商ヲ露国ト平和的ニ試ムルコトヲ云フノミ、而シテ卑見ニ依レバ、之レ即チ益々東洋ノ平和ヲ安全ナラシムル所以ナリト信ズ」と述べた。⁽³⁴⁾

この主張は、伊藤がこれまで桂とのやりとりの中で述べてきた、実際的な協商ではなく日露の協調をめざす、というも

のとは異なり、協商を更新して新しい「協商」を試みるにすぎないとするものである。これは、イギリス政府が二重交渉を疑っていることを踏まえ、イギリス政府に危機感を募らせることを狙った発言であろう。伊藤は、桂とのやりとりを通して日英同盟交渉を進める日本政府の方針を理解し、その上でこのような発言を行ったといえよう。

二回目の一月六日のランズダウンとの会見では、伊藤は日露協商において求めるところを述べ、「今日ニ於テハ日露兩國共ニ朝鮮ニ対シテハ政治上対等ノ勢力ヲ享有シ居ルガ故ニ、朝鮮ニシテ獨立文明國ノ義務ヲ果サル場合ニ於テハ、兩國競フテ助言若クハ援助ヲ与フルコトヲ得ルナリ、如斯基狀態ニテハ兩助言者間ニ衝突ヲ招クノ恐少ナカラズ、故ニ願クハ朝鮮ニ対スル助言若クハ援助等ハ専ラ日本ニ於テ之ヲ為スコト、定メ度シ」とした。⁽⁵⁶⁾伊藤はランズダウンに対して日本政府の求める韓国における利益について訴えたのである。

日英同盟交渉は、日本政府が一月二八日の閣議で決定した修正案を⁽⁵⁷⁾一月一二日に林がランズダウン外相に提出して以降、⁽⁵⁸⁾その条文の内容についてランズダウンより質問を受けるほかには交渉が進んでいなかった。そのため、一月六日までは前文において「別国カ韓国ヲ併吞シ又ハ其領土ノ一部ヲ占領スルヲ妨クルコト」を韓国における利益として求めることができたのみであった。

最終的に、一月三〇日に締結された日英同盟においては、第一条で「日本国ニ取リテハ、其清国ニ於テ有スル利益ニ加フルニ、韓国ニ於テ政治上並商業上及工業上格段ニ利益ヲ有スルヲ以テ、両締約國ハ若シ右等利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニ由リ、若クハ清国又ハ韓国ニ於テ両締約國孰レカ其臣民ノ生命及財産ヲ保護スル為メ干涉ヲ要スヘキ騷擾ノ發生ニ因リテ侵迫セラレタル場合ニハ、両締約國孰レモ該利益ヲ擁護スル為メ必要欠クベカラサル措置ヲ執リ得ヘキコトヲ承認ス」⁽⁵⁹⁾と、韓国において騒動が起った場合には日本政府が必要な措置を執ることができるような内容になったのであった。

ランズダウン―伊藤会談から日英同盟締結に至るまでに、伊藤が日英同盟交渉に直接的に関与したといえる史料は見当

たらないが、日英同盟は伊藤と桂の間で交わされた電報のうちで述べられた、また、ランズダウン―伊藤会談で伊藤が表明した、韓国での利益について日本政府が求める内容を実現できたといえよう。

おわりに

伊藤は、洋行の全体を通して、日英同盟交渉に関する情報を十分に得られていた。しかも、日本政府が伊藤の意見を求めるといふ形で日英同盟交渉に関する情報提供が行われていたため、日本政府との連携はとれていた。対露交渉に際しても、伊藤は桂の指示に従い、ロシアでの会談においては雑談にとどめ、ドイツに移動してから具体的交渉を始めた。その交渉に入る際にも、伊藤は桂と連絡を続け、桂がラムズドルフ草案をもとにした交渉を進めないとの判断を下すと、そのままラムズドルフとの書翰でのやりとりを中断した。伊藤が単独で対露交渉を押し進めようとしたようには見受けられないのである。さらに、ドイツからイギリスに移った後の？ランズダウンとの会談においても、伊藤はイギリス政府によってロシア滞在について警戒されていた事実を利用しながら、日本政府が日英同盟に求めることを主張したのである。

以上のことから、伊藤の洋行は、先行研究の多くが指摘するようなミスコミュニケーションも情報不足もなく、日英同盟交渉を十分に意識しながら進められたものであり、伊藤はむしろ日英同盟交渉に積極的に関与していたといえよう。

注

- (1) 伊藤の交渉について最初に言及されたのは、管見の限り、黒羽茂「一九〇二年における日英同盟の成立同期について」(東北大学文学会『文化』一六卷三号 一九五二年五月)である。
- (2) 黒羽茂『日英同盟の軌跡―帝国外交の真髓』(博文社 一九八七年)、伊藤之雄『立憲国家と日露戦争 外交と内政 1898～1905』(木鐸社 二〇〇〇年)、コンスタンチン・サルキン『伊藤博文のペテルブルグ訪問(一九〇一年一月～二月)』(下斗米伸夫編『日ロ関係 歴史と現代』法政大学出版局 二〇一五年)。
- (3) 柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」(『日本歴史』四六二号 吉川弘文館 一九八六年)
- (4) 藤井信行「『日英同盟』協約交渉(1901～02年)と日本政府(後)」(『川村学園女子大学研究紀要』一二二二号 二〇一一年)
- (5) 千葉功『旧外交の形成』(勁草書房 二〇〇八年) 一〇一頁
- (6) 広瀬順昭編『伊東巳代治日記・記録 ―未刊翠雨莊日記 第三卷』(ゆまに書房 一九九九年) 一二頁
- (7) 日英協約交渉始末(外務省編『日本外交文書 第三五卷』七一頁)
- (8) 一九〇一年九月一二日付井上馨より桂太郎宛書翰(千葉功編『桂太郎関係文書』東京大学出版会 二〇一〇年)

五三頁

- (9) 藤井信行「『日英同盟』協約交渉(1901～02年)と日本政府(前)」一二〇頁、千葉功『旧外交の形成』九二頁 参照。
- (10) 一九〇一年八月一五日付林董駐英公使より曾欄荒助臨時外務大臣宛電報(『日本外交文書 第三四卷』三二頁)
- (11) 以上、洋行の決定過程については、柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」、千葉功『旧外交の形成』参照。
- (12) 洋行の順路については、『都筑馨六関係文書』(国立国会図書館蔵 一九七九年)、馨光会編『都筑馨六伝』(馨光会 一九二九年)、外務省編『日本外交文書 第三四卷・第三五卷』、君塚直隆「伊藤博文のロシア訪問と日英同盟」(『神奈川県立外語短期大学紀要』二三号 二〇〇〇年 一〇月) 参照。
- (13) 一九〇一年一月一三日付小村外務大臣より英国駐在林公使宛電報(外務省編『日本外交文書 第三四卷』四七頁)
- (14) 一九〇一年一月七日付英国駐在林公使より小村外務大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三四卷』三九・四一頁)
- (15) 一九〇一年一〇月一七日付英国駐在林公使より小村外務大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三四卷』三六頁)

(16) 注釈14に同じ。

(17) 一九〇一年一月一九日付小村外務大臣より英国駐在林公使宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』三九頁）

(18) 注釈14に同じ。

(19) 一九〇一年一月五日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一〇四頁）。

ちなみに、この伊藤の見解は林董によって小村外相にも伝えられていた。（外務省編『日本外交文書 第三四卷』四七頁～四八頁）

(20) 一九〇一年一月二〇日付桂総理大臣より伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』四九～五〇頁）

(21) 一九〇一年一月二七日付桂総理大臣より（在露）伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五四頁）

(22) 一九〇一年一月二二日付英国駐在林公使より小村外務大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五一～五二頁）

(23) 一九〇一年一月二八日付井上伯爵より（在露）伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五五頁）

(24) 柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」六七頁

(25) 藤井信行「日英同盟」協約交渉（1901～02年）と日本政府（後）五三頁も同様である。

(26) 和文→英文↓暗号文↓英文↑和文という変換・伝達の過程の中で、「故にわれらは、斯の如き将来起り得べき事実の結果に就て、充分に攻究を尽さねばならぬ」という文章に変形してしまっている、とする。（柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と徳富蘇峰」六七頁）

(27) 『原敬日記』の伊藤談話を引用し、伊藤は、井上馨による「英国と同盟せば或は露仏独の聯合を再び起すの恐なきや」という質問について、井上馨だけでなく元老全体の意見だと誤解したと指摘する。（柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と徳富蘇峰」六七頁）

(28) 一九〇一年一月二八日付（在露）伊藤侯爵より井上伯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五五頁）

(29) 一九〇一年一月一日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一〇四頁）

(30) 柴崎力栄「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」六七頁

(31) 伊藤之雄氏は、この電報の時点で伊藤博文が日英同盟交渉を推進する桂や小村が主導権を握っていることを伊藤博文が理解し、自分の主張を進めることを諦めていたとするが（同『立憲国家と日露戦争 外交と内政 1898～1905』一三六頁）、この電報では、伊藤博文は自身の行う

日露交渉の性質が日英同盟交渉の急速な進捗により洋行前と変わっていることを理解したと考えるほうが自然である。

- (32) 柴崎力榮氏は、二月五日の、井上馨からの「他の元老は、既に内閣大臣と共に、同盟計画を賛助することに決意して居る」と告げる電報で、伊藤は自身の日本政府による日英同盟交渉の方針に関する誤解に気づいたとするが（同「伊藤博文のロシア行と歴史家徳富蘇峰」六八頁）、これについては、伊藤が一月二九日付の電報において日本政府の方針の変化に気付いている旨を述べていることから、二月五日付の電報で日本政府の日英同盟交渉の方針への理解が改められたとは考えにくい。

- (33) 一九〇一年一月二八日閣議決定（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五七頁）

- (34) 一九〇一年一月二九日付小村外務大臣より英国駐在林公使宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』六一頁）

- (35) 一九〇一年二月二日付露国外相「ラムズドルフ」伯と会見の記（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一〇九頁）

- (36) 露国外相「ウィッテ」氏と会見の記（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一一二頁）

- (37) 一九〇一年二月三日付英国駐在林公使より小村外務大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』六二

頁）

- (38) 一九〇一年二月六日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一二二頁）

- (39) 一九〇一年二月七日付井上伯爵より（在露）伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』六九頁）

- (40) 一九〇一年二月四日付ペテルスベルクにおいて伊藤侯爵より露国外相に渡せし書面（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一二二頁）

- (41) 一九〇一年一月二七日付桂総理大臣より（在露）伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』五四頁）

- (42) 一九〇一年二月六日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』六三～六五頁）

- (43) 一九〇一年一月一日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三五卷』一〇四頁）

- (44) 一九〇一年二月一日付桂内閣総理大臣より（在独）伊藤侯爵宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』七八～七九頁）

- (45) 一九〇一年二月四日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報（外務省編『日本外交文書 第三四卷』七九～八〇頁）

- (46) 同盟と協商の相違については、千葉功『旧外交の形成』六九頁参照。

- (47) 一九〇一年二月一七日付露国外務大臣より伊藤侯爵宛書翰(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一二八頁)
- (48) 一九〇一年二月一七日付伊藤侯爵より桂総理大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三〇～一三一頁)
- (49) 一九〇一年二月二一日付桂内閣総理大臣より伊藤侯爵宛電報(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三二～一三三頁)
- (50) 一九〇一年二月二〇日付伊藤侯爵より桂内閣総理大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三四頁)
- (51) 一九〇一年二月二九日付桂内閣総理大臣より伊藤侯爵宛電報(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三六～一三七頁)
- (52) 一九〇一年二月三〇日付伊藤侯爵より桂内閣総理大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三七頁)
- (53) 藤井信行「『日英同盟』協約交渉(1901～02年)と日本政府(後)」六三頁、君塚直隆「伊藤博文のロシア訪問と日英同盟」三九頁。

- (54) 英国外相「ランスタウン」侯と会見の記(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一三九頁)
- (55) 君塚直隆「伊藤博文のロシア訪問と日英同盟」(『神奈川県立外語短期大学紀要』二三号 二〇〇〇年一〇月)を参照。
- (56) 英国外相「ランスタウン」侯と会見の記(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一四一頁)
- (57) 注釈33に同じ。
- (59) 一九〇一年二月二二日付英国駐在林公使より小村外務大臣宛電報(外務省編『日本外交文書 第三四卷』七六頁)
- (59) 一九〇二年一月三〇日付第一回日英協約全文及附属外交文書の「テキスト」(外務省編『日本外交文書 第三五卷』一九頁)

(お茶の水女子大学大学院博士前期課程)